



第77回全道展開催にあたって

総合審査委員長・絵画部門審査委員長 木村富秋

第77回全道展の審査が6月7日(水)、8日(木)の2日間に亘り札幌市民ギャラリーで行われた。よく言われることだが「審査することは、されること」つまり私たち会員が……、全道展が……。

私は絵画部の会員として審査に臨んだのだが、いつもより出品作に何か強く若いエネルギーを感じていた。25歳以下(U25)の若者たちの出品が絵画部門に集中したのである。

学生を対象とした道内唯一の公募展として幾多の歴史を刻んできた「学生美術全道展」が、時代の流れのなか第61回展で終了した。その後、学生展は全道展のなかに統合されて今年2回目を迎えたのである。若い芽、原石のような若者たちの作品をどう受け入れ育てていくのか。全道展はじつに大きな課題を背負ったのである。

年に一度の全道展に、若い芽の作品をどう取り入れていくのか、一般観覧者にも納得できる陳列への配慮、工夫が重要に思われる。急速な時代の流れの中で生まれてきた表現の多様化等、入選・受賞作の中に、浅く未完な若い芽の作品がある事も想定し、会として受け入れることを選択したのだから。

只、審査会の後半で或る長老会員が危惧した言葉が深く胸に刺さったのは私だけではないと思う。

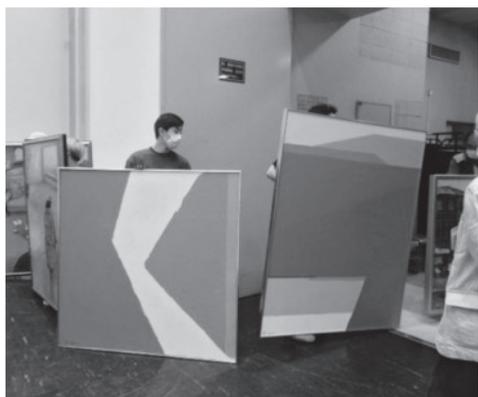
作家集団としての全道展。「個」の表現・精神世界を認め合いつつ、それぞれの造形世界を時代の中で切り結んできた作家同士、それが、私が育てられた全道展だという思いは今でも変わらない。

何より会員として、私たちが責任ある仕事をしなければ何を言っても始まらないことなのだ……。



会場風景 (札幌市民ギャラリー) 2023年6月18日(日)

第77回全道展（2023年） 搬入・審査風景



搬入風景（札幌市民ギャラリー） 6月6日（火）



総会（札幌市民ギャラリー） 6月7日（水）



審査風景 6月7日（水）



審査風景 6月7日（水）



審査風景 6月8日（木）



総合審査風景（札幌市民ギャラリー） 6月8日（木）

第77回全道展審査を終えて

清野 知子（版画部門委員長）



審査風景（版画部門）

戻りつつある日常と再会に感謝。期待と緊張の中、活気ある審査となった。ここらが全道展の新戦力となるスタートとも云える。新会員は佐藤麗子さん、高崎幸子さんの2名。テーマと技法は異なるが長年力強く美しい作品を発表し続けての推挙である。新会友の生方正俊さん。明るい色彩と連続する植物に生命力をも感じる努力作である。会友賞は今回は無く残念だった。皆完成度は高く更なる奮起に期待したい。佳作賞は、久保田道子さん、竹内健晃さん。共に巧みな構図による景色が深い物語性を感じさせる力作である。奨励賞は、金山道子さん、野間千恵さん、土肥宏充さんの3名。三人三様の個性が多くの可能性を感じさせる努力作だ。

退会、出品者の減少等ダメージはあったが、すべての作品から真っ直ぐな熱意を感じた。期待が広がり現実となる事を切望する。

葦沢 淳一（彫刻部門委員長）



審査風景（彫刻部門）

コロナ禍による経済活動や行動の制限が解除され、出品数が回復することを期待したが、残念ながらそうはならなかった。しかし少ない出品数ゆえに、一つ一つの作品を丁寧に、また掘り下げて審査することができた。時には口角泡を飛ばし白熱した議論を展開することもしばしばで、充実した審査会であったと思う。

特に印象に残ったのは、会友の作品の充実ぶりや作品から伝わってくる制作に臨む姿勢や思いであった。中でも会員に推挙された高橋ひとみさんと櫻井純さんの作品は秀逸であった。今後の更なる飛躍を期待したい。また一般出品者の中では、斉藤眞紘さんの独特の世界観や、中村俊幸さんのリアリティーを表現する技術が印象に残った。

一般出品者の出品数が増える気配を見せないことや、若い出品者が少ないことは従前から懸念していることである。来年以降懸念が払拭されることを願うばかりである。

阿部 綾子（工芸部門委員長）



審査風景（工芸部門）

一点一点の作品と向き合い、意見を出し合い、丁寧な審査が行われた。応募作品は前年と同数。半数が入選となった。北海道新聞社賞の陳俞沁さんは、素材が持つ透明感を生かし繊細な表現であった。全体として力強い輝きを放っていた。奨励賞の荻山ひとみさんは、構図の組み合わせで立体的な動きを感じさせた。奨励賞の香西毅さんは、確実な技法で釉の発色も鮮やかであった。奨励賞の辻岡環さんは、独特な質感に細やかさと大胆さを重ねた。今後の深化に期待致したい。賞候補に挙がった荒井千恵子さん、早川洋一さん、今後の展開に期待致したい。初挑戦のフレッシュな作品が散見された。入落どちらの結果であっても、得るものがあつたのではないかと思い、勇気ある一歩を次に繋げてほしい。全道展を自己の表現の場として、工芸の多種多様な創作がより一層展開されることを望みたい。

◆ギャラリートーク◆ 2023年6月18日(日) 13時～



札幌市民ギャラリーにて 波田浩司会員（絵画）のギャラリートーク

絵画 波田 浩司



全道展は高校2年生（17歳）の時から、出品し続けているので36年出品していることになります。31歳のころから、絵の方向性がきまってきました。それまでは、毎年作風が変わり迷っていました。大学卒業後は特に苦勞しました。新しいものを描くのではなく、描きたいものを描けばよいのだと、30歳になって考えるようになり、自由に描くことができるようになったと思います。

今回の作品は家族を描いています。重ね塗りはしていないため、3原色を使って一気に仕上げます。制作期間は1カ月です。油はサンシクドリンシードオイルを少し絵の具に混ぜて描きます。大きな面積は、リンシードやバンドルを使用しています。下地処理はしていません。するときは、アクリルジェッソを裏キャンバスに4層塗り、画面を霧吹きで濡らしながら、サンダーで削り平らな画面を作ります。

版画 関川 敦子



幼い頃より、絵を描いたり、工作や手芸などのモノ作りが大好きでした。

学生時代にリトグラフの技法を学び、絵を描き、版を作り、刷り上げるといふ工程の楽しさを知り、現在に至っています。

作品を作るにあたっては「言葉」からインスピレーションを受け、自分の頭の中に浮かんだストーリーを絵の形にしていきます。

「リトグラフ」はももとは印刷技法として発達してきたものです。リトグラフで作られたポスターや絵本の挿絵など有名な作品もたくさんあります。

私は、豆本作家としても活動していますが、版画を作るときに浮かんだストーリーを短い文章にして作品に添えた豆絵本を作っています。今のところデジタル印刷で作っていますが、文字も絵もすべてリトグラフで刷った豆本を作りたいと思っています。

彫刻 田中 隆行



私は、これまで作品名をつける際、ほとんど意味のたないように「女・立」「Tシャツを着た女」というように形態そのままの題名をつけてきた。それは、具象彫刻ではあるが、様々なイメージをもって欲しいからである。受けるイメージが多様であればあるほど具象作品は抽象的になると思ひ、そんな具象彫刻を創りたいとこれまで制作してきた。

しかし、昨年「地」というテーマで制作している。それは、私たちが住むこの「地」が次の世代、また次の世代へと平和で豊かに受け渡すことができるか、大変危うくなってきているからである。地球温暖化、異常気象、原発再稼働・新增設、軍事費倍増等々このまま進めば、孫の時代は大変な「地」になってしまう。これら全て、人間がこの地を壊していることを一人でも多く気が付いて欲しいと彫刻を通して伝えたいと思うようになってきた。



左から馬場雅己・新関千裕・阿部綾子会員（工芸）による作品講評



羽山雅愉会員（絵画）による作品講評



石橋周子さん（左）の「新怪魚」奨励賞を講評する
田中隆行会員（彫刻）



福井路可会員（絵画）による作品講評



山田乃理子会員（絵画）による作品講評

第77回全道展表彰式 2023年6月18日(日) 17時30分から



受賞者の皆さん ANA クラウンプラザホテル札幌 3F 鳳の間にて

新会員の皆さん(6名)



川口浩
事務局長

かみやれいこ
(絵画)

佐藤真康
(絵画)

佐藤麗子
(版画)

高崎幸子
(版画)

櫻井純
(彫刻)

高橋ひとみ
(彫刻)



4年ぶりの懇親パーティー (18時15分から) 祝辞・乾杯を北海道立近代美術館学芸副館長 中村聖司様より

全道美術協会賞・北海道美術館協力会賞（絵画部門）

大野 海玖（札幌市）



大野海玖さんのご挨拶

●「受賞の喜び」の言葉●

この度は、全道美術協会賞と北海道美術館協力会賞のダブル受賞という身に余る賞を頂き、誠にありがとうございます。驚きや嬉しさと同時に背筋の伸びる思いであります。

賞を頂いた作品は、術の進化でくちていくサイクル「外」（がい）のものを作ったなら、それで崩したバランスやモノの責任はとって行くべきだ。という意味を込めて制作しました。

IT産業やAIが急速に発達する今の世界では、同時に温暖化など、世界的なバランスが乱れてきています。SDGsという言葉が最近耳にすることが増えましたが、実際日常で意識している人はどのくらいいるのでしょうか。この意図を知ったあなたも当事者である。という注意喚起を込めて、一度見たら脳裏に残るようなおどろおどろしい作品に仕上げました。

決して万人受けするような描き方ではありません。制作意図もこうしてお話をする機会がなければ光があてられません。

今回、選んでくださった審査員の皆様、私をご指導くださった先生方、関わる全ての方々に深謝いたします。賞を頂いたことを励みに、今後も精進したいと思います。

北海道新聞社賞（工芸部門）

陳 俞沁（小樽市）

チンユーチン



道新賞受賞作品「うたかた—clone—」の前で

●受賞の喜び●

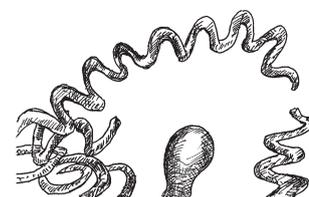
2020年から始まったご存じのこの世界的なイベントは、思想が強い私にとっては単なる計画のようだと感じた。

そこで今回の作品を制作した。「うたかた—clone—」は、この2年で私が感じた人工細胞分裂・増殖の脆さと危うさを繊細なガラスを使って表現した。

クローン技術が発達し極端に言えば、人間までもが作られてしまう。真の核を持たない存在が社会を席卷する。

多様性、個を尊重する全道展でこのような評価を頂けたこと、心から感謝申し上げます。

謝謝大家。



全道展十勝地区展報告 「過去作品もならぶ！」

十勝地区事務局 今西 直人



渡邊禎祥会員のギャラリートーク

第25回全道展十勝地区展が7月27日から8月1日まで帯広市民ギャラリーで開催された。今回は本展作品と初入選作品、そして今の表現スタイルへの転機となった思い出のある作品を一同に展示してみた。40年前の作品もあり個人の変遷を垣間見た思いで興味深い展覧会となった。「こんな絵を描いていたんだね」「観ごたえがある。また来るよ」となかなかの評判でした。たまにはさらけ出すのもよいか。

今年の初入選の有沢朱美（絵画）を仲間を迎え、佐藤真康（絵画）が新会員となり、更にアップした十勝。メンバー17人、43点情熱ある作品は会場狭しと熱気にあふれた。

ギャラリートークも実施した。神田日勝と縁が深い渡邊禎祥会員の軽妙な語りに40人程の来場者は釘付けであった。今後も全員で知恵を出し合い、より良い地区展を目指したいと思う。



全道展室蘭地区展報告 「2023 全道展室蘭地区作家展」

室蘭地区事務局 矢元 政行

室蘭地区展 2023年8月2日(水)～8月6日(日) 室蘭市民美術館オープンスペース



今年も、今まで通り室蘭地区作家展を開催することができたことに深く感謝したい。コロナの心配もあったが、昨年に引き続き今年も8月2日(水)～6日(日)の5日間、室蘭市民美術館オープンスペースで開催することができた。今年は、大変な猛暑だったが、会場は冷房が効いた中に絵画と陶芸がゆったりと展示され、訪れた人は静かにじっくり鑑賞することができた。

出品者は18名、入場者は198人と昨年より減った。彫刻と版画の作家の出品がなく絵画と工芸だけの展示となった。また、今回は受賞者もいなかったため、何か寂しさの漂う雰囲気だったが、初出品初入選となった久保田新一さんの作品が花を添えてくれた。この低調、停滞ムードを何とか打破したという気持ちは、出品者全員の共通認識のようだった。最終日の作品の搬出、会場の片付けの後、短い時間ではあったが次年度に向けての展覧会の在り方など話げできた。来年は、懇親会など出品者の親睦や作品について語る機会を設けることで概ね一致した。

全道展道東地区展報告 「彫刻部門の躍進！」

釧路、根室地区事務局 宇佐美 修一

釧路地区展 8月2日(水)～8月6日(日) 釧路市生涯学習センター

根室地区展 2023年8月9日(水)～8月13日(日) 根室市総合文化会館



コロナが5類相当になり、マスクなしでの第77回全道展、期待と不安を感じながら、両地区展も無事終了した事が何よりです。今年の地区展では、釧路から彫刻部門の躍進が見られたことは、大変喜ばしい限りです。彫刻部門は斎藤真紘新会友(佳作賞)、石橋周子さん(奨励賞)、初入選初受賞(奨励賞)の中村俊幸さんは頼もしい限りです。

又、絵画部門で、根室高校3年佐藤由乃さんも地区展でただ一人の(新人賞)2年連続の入選、素晴らしいです。初入選も釧路から絵画で1名、彫刻で1名、中標津から絵画1名、根室から絵画(学生)1名と道東地区の若い方の躍進が見られたことは地区展の皆が歓迎するところですよ。次に続く若い方に大きな力を与えたことは大変うれしい限りです。又、地区展に参加されている方にも学生が参加していることで一般にはない学生が捉えた新しい感覚が垣間見える事でもあります。釧路から参加の加藤三枝子(絵画)会友の広島原爆ドームを捉えた平和への願いを込めた作品、斎藤真紘新会友の釧路湿原に命が芽吹く彫刻作品など見応えがあり、大変好評の展示会であり、さらなる前進をしていただきたいと願うばかりです。学生においては、既に部活動にむかっており本展で同じ学生の作品を鑑賞してきた事が来年の作品制作にどう生かせるのか楽しみな一年でもあります。私自身も自由にさらなる作品制作に、学生と一緒に研鑽あるのみです。



全道展函館地区展報告 「久しぶりの懇親会」

函館地区事務局 輪島 進一

函館地区展 11月9日(木)～11月14日(火)函館芸術ホール 入場者数550名



私が所属する東京の公募団体の審査の進行にコンピュータが導入された。それは審査時に出てくる作品と同時に横のスクリーンに出品者の年齢や入選回数等の情報が出てくるというものだ。そこでわかったのは、「なんと新鮮なイメージの画風だろう」「洗練された構成とさわやかな色彩だ」「丁寧で密度ある仕上がりだ」等々と思うたびに横のスクリーンを見ると、6、7、80代が圧倒的に多いことがわかった。若い世代よりも画風が若々しいのだ。そこで自分なりに考えたのは、20世紀はモダニズム等美術隆盛の時代であり、その影響下で生き抜いてきた今の高齢世代は多かれ少なかれ、その影響を受けてきたからではないか、との思いだった。

さて、函館地区展…出品者の高齢化は加速度を増す。ちなみに彫刻の出品者の平均年齢は56歳であるが、絵画出品者の平均年齢は77歳である。合評会では、東京での審査の話題と、また今回の地区展での、ある若い鑑賞者の感想をお伝えした…「親の介護、自分の病気、仕事やお金のこと、家族のこととか、いろんなことを抱えながら、日常の面倒なことを乗り越えて、こういうデッカイすごい描いてるんだ、凄い！私もガンバロー、と思った…」と。80、90歳まで、否、死ぬまで頑張ろうとの覚悟をもってほしいと激励した。また数年ぶりに懇親会も開くことが出来、皆で来年への決意も新たにしました。

第77回北海道新聞文化賞社会部門に手島圭三郎さんが受賞

木版画家で絵本作家として国内外で高い評価を受けている手島圭三郎さん（全道展版画部門会員）が、社会部門で第77回北海道新聞文化賞を受賞されました。

力強い彫りのなかに繊細さと緻密さを込めて、厳しい北の自然に生きる野生動物やアイヌ民話の世界に命の豊かさを表現されてきました。

作品は、イタリア・ボローニャ国際児童図書展グラフィック賞受賞、米紙ニューヨーク・タイムズ「世界の絵本ベストテン」に選出など数多くの賞に輝き、2023年には『手島圭三郎全仕事』増補改訂版を出版されています。

受賞者の「これまでの歩みと喜びの声」は、北海道新聞2023年10月29日(日)朝刊に掲載されています。

彫刻家・本田明二ギャラリー

2023年4月22日 OPEN
月形樺戸博物館別館



会場入口 パネル

今年は北海道の地で制作を続けることにこだわった彫刻家本田明二の没後34年にあたる。故郷の月形町教育委員会の厚意により、「彫刻家・本田明二ギャラリー」が月形樺戸博物館・別館として2023年4月22日(土)にオープンした。素朴で温かみがあり、時には大胆な簡略表現をもちいた彫刻22点とデッサン8点が展示されている。

本田明二（1919年—1989年）

1951年 第6回全道展会員推挙

1953年～1960年 第8回全道展～15周年記念全道展 事務局長



「馬頭」 テラコッタ 1980年代



「けものを背負う男」など展示



「スタルヒンよ永遠に」1979年

※旭川市のスタルヒン球場にあるスタルヒン像 その基となる石膏原型が常設展示されている。

開館期間 2023年4月22日（翌年から3月20日）～11月30日

（月寒樺戸博物館の入場料でご覧いただけます。）

開館時間 午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）

住所 月形樺戸博物館 北海道樺戸郡月形町1219番地 電話 0126-53-2399

（川本ヤスヒロ記）2023,5,30

「石狩のスタジオで創作」

訪問・撮影 川本ヤスヒロ

川名義美会員（彫刻部門）は1956年上砂川町生まれ。1976年第31回全道展に出品し「S嬢」で初入選。北海道教育大学岩見沢分校在学中で21歳のときだった。八雲高校に2年勤めてから筑波大学大学院修士課程に進み、1986年第41回全道展に「王」の木彫大作を出品して全道美術協会賞を受賞した。翌年、会友推薦になったが2010年第65回展に会員推挙になるまで23年かかった。

今年の第77回全道展に「E, W&F」を出品した。頭部・顔・首はテラコッタ、胸部が木彫で作られた作品である。全道展の彫刻作品でもテラコッタと木彫を併合させた作品をはじめて見たが、川名さんの新たな試みであろう。20年前に新築した石狩のスタジオで石彫、木彫、テラコッタの制作をおこなっている。テラコッタは、粘土で作品を作り、完全に水分を抜き乾かしてから750度で焼く。粘土に弁柄を混ぜることによって焼き上げた作品に一層深みができる。アトリエ内には、制作された作品群がたくさんある。札幌市新琴似の自宅から石狩のアトリエまでバイクで毎日通っている。石狩の冬は雪が多く雪かきをしてからアトリエに入る。

好きな彫刻家は、リン・チャドウィック（1914年～2003年 イギリス）、ヘンリー・ムーア（1898～1986 イギリス）、ジャーマイン・リシェ（1904～1959 フランス）、ジャコモ・マンズー（1908年～1991年 イタリア）である。リン・チャドウィックの作品「ジュビリーⅣ」は、大阪中之島美術館の北側の中之島通沿いにある。

2013年にさいとうギャラリーで個展をおこなっているが、アトリエに埋もれている作品群や積極的に制作している魅力的なエスキースの小品などを近作とともに近い将来、個展で見たいと思う。今日もアトリエで制作に励む川名さんは、どんな作品を生み出すのか期待してやまない。



第77回全道展搬入をおえて 6月6日撮影



石狩市のスタジオは60畳で作品と作業道具でいっぱいである 2023年9月17日撮影

「失敗も前向きにとらえたい！」

インタビュー 梅津 薫

問1 油絵を始めたキッカケは？いつ頃から

応え：絵は小さい頃から見るのが好きだった。高校の3年間、絵画部と陸上部（ハードル、槍投げ）に所属し、絵画部では初めて油絵を習い、30号～50号の作品も描いた。忙しくも楽しい3年間だった。

問2 自分は絵を描くことが好きなんだと、意識したのはいつ頃から？

応え：絵を描くのはあまり上手ではなかったけど、中学3年の絵の授業で、先生から果物を黒い線で縁取りして描いた絵を素晴らしいとみんなの前で褒められ、自由に描く絵の面白さを知った。

問3 好きな作家や影響を受けた画家は？

応え：ピカソ、マチス

問4 全道展に出品しようとおもったのは？

応え：40歳を過ぎてから公民館サークルに入り油絵を始め、北海道には新道展、道展、全道展の公募展が有るのを知ってサークル仲間と見に行くのが楽しみだった。習っていた川西先生、鉢井先生は新道展の会員でしたが、私の憧れていたのは型にはまらない自由な全道展だった。いつか全道展に出品したいという気持ちがあった。2002年「第57回全道展」で「赤のテーブルⅡ」F100号が初入選した時は本当に嬉しかった。



問5 好きな色は？

応え：色は赤が好き。赤はエネルギーを感じる。元気を貰います。

初入選の時、遠藤ミマン先生から言われた言葉が嬉しかった。「貴女の赤は良いね」。竹岡洋子先生は「貴女は北海道の人にしては珍しく明るい赤を使うのね、赤は難しいけど赤に色々まぜて深みの有る色をみつけて頑張ってるね」と言ってくれたことも思い出です。

問6 アトリエについて

応え：私共には、子供が長女、長男、次男と3人いますが、事情で孫（次男の子）を預かる事になり、私の2階のアトリエ（10畳）は孫の部屋になり、大作を描く時は孫が高校に行っている時間に頑張って描いている。絵を2階から下ろしたり上げたりする時は、バルコニーにロープで主人の手を借り2人係り。2階から下ろした絵を1階の居間で額に入れ、見直し、玄関から運んでもらっていた。

問7 今とこれからについて

応え：最近は始まりと終わりシリーズを描いている。

「直線には始まりと終わりがある 真実の直線には心がある 目に見えない世界が目に見える世界をささえている 永遠の真実は目に見えない心で見えるもの」（ウィリアム・ブレイク）

第77回全道展の出品作の題名はこのウィリアム、ブレイクの詩からのもの。絵を描いて行くうちにウクライナの戦争が気になりシリーズを描いている。直線の始まりは必ず終わりが有ると信じて描いた作品。その時マチエルと色と色の響き合いに気を付けて描いていた。描いていて時々描きすぎて、前の方が良かったとガッカリする。私の計画性の無さではあるが、「失敗も前向きにとらえ、自由に描くことは何ものにも代えがたい」と自分に言い聞かせて、今後も自分に納得のいく制作を続けていきたい。

Bois 木版画展 (10 回展)

道新ぎゃらりー 2023年3月9日～3月14日



Bois 木版画展は、第1回展が2012年3月20日～25日にさいとうギャラリーで開催された。全道展版画部門の吉川勝久会員がこの会をまとめ、全道展に出品していた6名が出品していた。Bois とは、フランス語で森や木材の意味である。

吉川氏指導のもとで、木版画を学んできた人たちが、毎年、展覧会をおこない(2020年は新型コロナウイルスの影響で中止)、木版画の制作を通していろいろな技法を学び、各自がそれぞれのおもいで創作している。今回で10回展の記念すべき会場には15名の個性豊かな作品とともに木版画で制作されたカレンダーなども展示されており、鑑賞者を楽しませていた。(川本ヤスヒロ記) 2023,3,11

佐野果帆子 1 人卒業制作展

ギャラリー大通美術館 2023年3月21日～3月26日



初めての個展で、会場には、昨年の第76回全道展に初出品して協会賞と北海道美術館協力会賞を受賞した「アトリエと通路」の大作をはじめ、4点の大作が展示されていた。その他、鉛筆でしっかりと追求した石膏デッサンが3点あり、卒業制作展にふさわしい個展会場になった。全体的に時間をかけて丁寧に着色した作品が多く、画面からは静かな空間が広がっている。今は第77回全道展に向けて制作に励んでいる。(川本ヤスヒロ記) 2023,3,22

※77回全道展で奨励賞受賞

恵庭美術協会企画展 テーマ「水」

夢創館 2023年3月23日～3月26日



恵庭美術協会の企画展。全道展絵画部門の山本恒二会員が「きらめく季節」を出品、版画部門の高崎勝司会友が「棲」、高崎幸子会友が「水」を出品し、生き生きとした透明感のある作品が魅力的であった。

高崎勝司会長をはじめ、7月開催の50周年記念展に向けて、準備を進めている最中である。(川本ヤスヒロ記) 2023,3,24

※高崎幸子さんは第77回全道展で会員推挙

佐藤静子個展「パンタ・レイ」展

苫小牧市美術博物館 2023年3月28日～4月1日



10代の頃の作品から現代まで自身の絵の軌跡が見えてくる大作7点、小品26点は重厚な絵肌で絵画の精神性を改めて感じた、静かなる主張である。

題名「パンタ・レイ」とは、『万物は流転する』。2500年前の古代ギリシャの哲学者ヘラクレイトスの思想を作品にかもし出していると想像できる。

今を生きる自分、絵画に求めるもの、絵画に何が可能なのか、闘う信念が強く表現されている。(小笠原実好記) 2023,3,31

2023年の展覧会から

第50回道新油絵教室アルディ会展

道新ぎゃらりー 2023年4月20日～4月25日



「森の詩Ⅱ」(左)・「森の詩Ⅰ」(右)



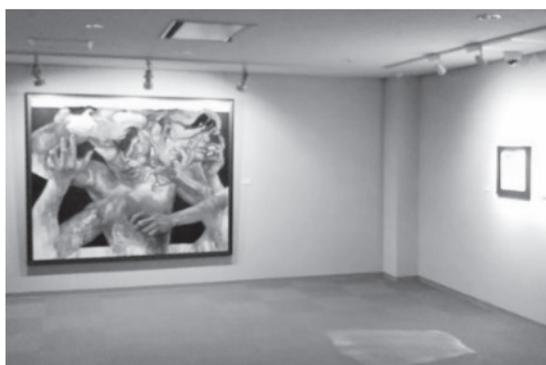
寸時にデッサンを行う米谷哲夫会員

米谷哲夫会員が道新で指導している油絵教室の展覧会「アルディ展」が開催された。50回目の記念展覧会である。米谷会員は1973年、第28回全道展で会員に推挙されてから今年で50年になる。4月で96歳になり、全道展や独立展で活躍している先生の油絵教室で学んだ生徒には、全道展へ出品して活躍した人たちもたくさんいる。今回の展覧会では10名が油彩画を出品し意欲にあふれた作品が展示されていた。生徒の個性に向き合う先生の豊かな指導姿勢が伝わってくる。

(川本ヤスヒロ記) 2023,4,20

平野遼と佐藤仁敬 —変化する人間の輪郭—

HOKUBU 記念絵画館 2023年6月1日～7月23日



3階建ての美術館で、1階は安井賞展等で活躍した平野遼氏の作品が4点、2階と3階は佐藤仁敬会員の作品がそれぞれ6点展示されていた。2・3階は部屋の明かりをかなり落として、ここ数年の作品を展示。

「人間らしさとは、時に生臭くもあり無駄な要素に満ちあふれている。(中略)人間の本来の在り方を伝えたい」という佐藤氏。ここ数年の佐藤氏の作品は、背景が黒で塗られ、筋肉の動きが伝わるような生々しい人体を描いている。「無駄な要素」と語る佐藤氏だが、作品は、人生の苦難に立ち向かいながらの必至に生きようとする人間の姿を無駄なく描いている。

(中川治記) 2023,6,10

木村富秋・木村由紀子展

ギャラリー大通美術館 2023年6月13日～6月18日



木村富秋会員の200号の大作(左)



木村由紀子会員の200号の大作(中央)

木村富秋会員と木村由紀子会員の2人展。富秋会員の作品は200号4点、100号4点他中品を入れて計18点の展示。テーマは人体と鳥を据えながらも風や海、秋の気配や光など魅力的な色彩空間を確かな筆力で表現して圧巻。由紀子会員は「CRETOS」200号2点、F130号2点、S100号号2点中品4点と長い間の同テーマに対する研鑽の成果が伺える展示。とても見応えのある展覧会であった。尚、隣室では木村教室の「新樹の会」も同時に開催された。

(梅津薫記) 2023,6,14

『銅版画人生60年・渡会純价展』

大丸藤井セントラルスカイホール 2023年6月20日～25日



6月21日(水)は誕生日(87歳)

渡会純价会員は大丸藤井セントラルで2年に1回の個展を開催している。個展期間のなかに自身の誕生日を設定してきた。個展は、60年前に故・浅野愷さん(全道展版画部門会員)と銅版画の二人展を大丸藤井セントラルで開催したのがきっかけで、その後大丸藤井セントラルで多くの個展を開催してきた。

会場には23点の銅版画と2点のドローイングの25点が展示されている。

ドローイング「オーケストラ」・銅版画「いつかきた路(H)」をはじめ、音楽の世界や空間が画面いっぱいに広がり、さわやかな風が会場に流れていた。(川本ヤスヒロ記) 2023,6,22

伏木田光夫油絵個展

大丸藤井セントラルスカイホール 2023年6月27日～7月2日



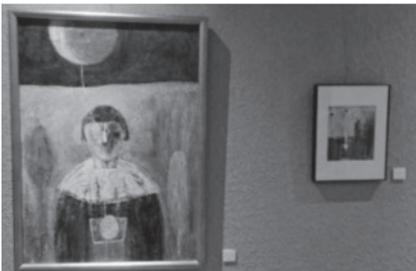
7階全会場に「広場を横切って行く聖フランシス」(左)をはじめ82点展示



展示作品はA・B・Cとエレベーターエントランスホールを含め、人物画28点、静物画40点、花6点、クロッキー4点の総計82点。コロナでできなかった4年ぶりの個展は壮観である。体があちこち綻びながらも、それも含め、絵を描き続ける事は人生そのものであるという。セザンヌ、モンドリアン、マチスやヘルマン・ハッセ等々、会話は作品とともに魅力的なひと時だった。(梅津薫記) 2023,6,27

富田知子展

ホテルニューオータニイン札幌 2023年6月26日～2023年7月30日



全道展絵画部門の作家が1月から7月まで(5月を除く)ホテルニューオータニイン札幌の「北海道の画家を応援するプロジェクト」の企画で小品展を開催した。1月は齊藤嗣火、2月は川本ヤスヒロ、3月は波田浩司、4月は渡辺通子、6月は西澤弘子会員が20点前後の小品を発表した。7月には富田知子会員が21点の作品を展示。大胆な画面構成と黒の色彩の透明感が美しく心に響いた。(川本ヤスヒロ記) 2023,7,27

斎藤矢寸子個展「Raputa syndrome」

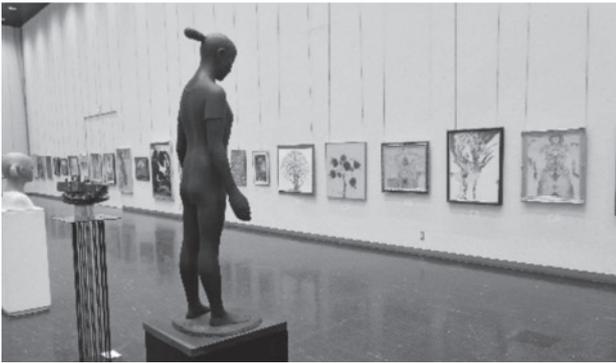
アートホール東洲館 2023年8月2日～15日



2014年「植物譚 Seeds 青い葡萄」から2022年「豊饒の大地再び」までの大作150号6点を含む21点を展示。作品に登場する人物の中には、叔父にモデルになってもらい、そこから絵画化して作品にしたものもあった。F50号「残響」は水彩とパステルで描かれていて、とても密度の深い作品であり、大作に繋がる要素を感じることができた。(川本ヤスヒロ記) 2023,8,5

第47回北海道平和美術展

札幌市民ギャラリー 2023年8月2日～6日



北海道平和美術展は、平和と民主主義を守る北海道の美術家・美術愛好家なら誰でも出品できる展覧会として本郷新、高橋北修、本田明二各氏をはじめ30名が呼びかけ人となり、1974年に立ち上げた美術展である。今回は116名が出品しており、全道展絵画部門の佐々木俊二会員、版画部門の重岡静世、福岡幸一各会員、彫刻部門の田中隆行、水口司各会員が出品している。また、第77回全道展に入選した奥井登代さん（油彩）「今、地球人生生きる」、室谷孝枝さん（水彩）「タウシュベツ川橋梁」などの作品が出品されていた。

（川本ヤスヒロ記）2023,8,6

伏木田光夫「生命のフリーズ」展

ギャラリー・エッセ 2023年8月8日～13日



7月に米寿（88歳）を迎えた伏木田光夫会員

大丸藤井セントラルスカイホールでの個展に続き、ギャラリー・エッセでもP150号のキャンバスに描いた「生命のフリーズ」の連作が展示された。第69回（2014年）から第73回（2019年）の全道展に出品した6点の作品で、順に「泉」、「アラバスク」、「ダンス」、「春の祭典」、「最後の夏」、「命の水」の大作であった。一堂に会した壮大な「生命の輝き」をゆっくり鑑賞しながら、豊かな充実した時間を過ごすことができた。12日には「生命のフリーズ」をめぐる「伏木田光夫＋柴橋伴夫」のギャラリートークが行われた。

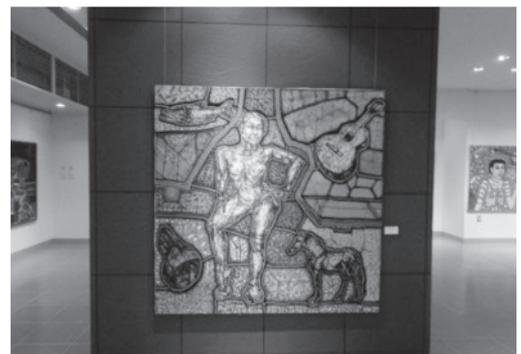
（川本ヤスヒロ記）2023,8,12

砂田友治・陽子回顧展

アートホール東洲館 2023年8月17日～31日



砂田友治（1916～1999年）



砂田陽子（1951～2019年）

砂田友治氏は第11回全道展会員推挙、第26回展から第29回展まで事務局長を行い、会のために貢献した。今回の展示作品は、F100号の「人物構成」（1955年）をはじめ、F200号の「十字架降下とレール」（1995年写真左）・F200号の「永遠のドラマと光芒を失った太陽」（1998年写真右）など計8点。単純化した画面構成が力強く、色彩が非常に美しい。砂田陽子さんは第46回全道展会員推挙、S100号の「家族RED—TABLE」（2015年）をはじめ16点を展示。今回展示されているF100号の「人と静物A」（1991年）からF130号の「家族RED—TABLE・絆」（2018年）には、必ず砂田陽子さん自身が造形的に描かれている。両親と妹さんと暮らした家族の思い出があってこそ自分という存在があるのだとキャンバスに明確に描き確かめている。

二会場での父娘展は、見応えのあるそれぞれ独立した作家の回顧展であった。

（川本ヤスヒロ記）2023,8,18

渡辺貞之×金淵浩之 二人展

茶廊法邑 2023年9月2日～11日



金淵浩之さんは石狩市在住の画家。パステル画 30 号の「海」をはじめ 8 点を出品。渡辺貞之会員は油彩画 200 号の大作「五つの箱」をはじめ 10 点を出品。パステル画と油彩画の二人展は、どちらも繊細で独自の発想をもち、会場全体から新鮮な雰囲気を感じることができた。

(川本ヤスヒロ記) 2023,9,4

重岡静世 油彩・木版画展「幸せへの道をもとめて」

アートホール東洲館 2023年9月2日～15日



A 室の壁面には木版画 29 点を展示、「Peace」はハーブを奏でる人、鳥、原爆ドームを背景に平和の大切さを深く願う作者の気持ちがこめられた作品である。作品の多くは、子供たち、鳥、母子が登場している。ひまわりや鳥を描いた「生きる」や、母子と鳥たちとりんごを描いた「りんごのみのり」がよかった。B 室の油彩画は、重岡静世会員の若い時の作品で S 100 号の作品も展示されていた。

(川本ヤスヒロ記) 2023,9,8

イコン塾展

岩見沢市絵画ホール・松島正幸記念館 2023年9月2日～30日



全道展関係では伊藤記子、桔梗智恵美、西村徳清、田崎謙一、梅津薫が出品。ほとんどの出品作品はイコン画で「聖母」や「最後の晩餐」などが出品されているなか、「風(ふう)」や「凌霄花(のうぜんかずら)」などテンペラ技法を駆使した作家独自の作品もあり内容の濃い作品をみることができた。

(川本ヤスヒロ記) 2023,9,11

友末智子展 Preghiera —いのり—

アートホール東洲館 2023年10月3日～15日



1991 年第 46 回全道展出品作品「うたかた(鉦山町の秋)」F 100 号から今年の全道展終了後に描いた近作 200 号の「PREGHIERA —いのり—」を含め、A 室には大作の作品が展示されていた。PREGHIERA(プレגיעーラ)はイタリア語で祈りという意味があり、今はこのテーマを追求している。2017 年第 72 回全道展で会友賞を受賞した作品「宙」や 2018 年第 73 回全道展で会員推挙になった作品「PREGHIERA」の作品は、特に完成度の高い作品で、今描いている作品につながっている。また、近作においては、これまでの重い色彩から明快な色彩に変化し、常に追求している作者の姿が絵から感じることができた。

(川本ヤスヒロ記) 2023,10,3

2023年の展覧会から

工藤善蔵作品展 素直な感動 筆勢の命に託す

室蘭市民美術館 開館15周年記念特別展 2023年10月3日～11月5日



1953年小学校4年の時に描いた「陣屋の杉」(水彩)から今年第97回国展に出品した「命を背負う」(油彩)までの73点が展示されており、会場には工藤善蔵さんの熱気が漂っていた。10号から30号までの多くの小品はその場で見て感じて描いた感覚的な作品が多いが、一貫して工藤さんの想いが造形化されているので、作品を見ていると自然に絵の中に吸い込まれていく。最近の作品の画面を構成しているものにリンゴの木や働く人たち、赤ちゃんなどが描かれている。リンゴの木は1980年頃から何枚も描き追求を深めて、そういう自然の中での生命力を感じさせる群像の表現がとても美しい。(川本ヤスヒロ記) 2023,10,13

深川市アートホール東洲館セレクション展

恵庭市市民会館 2023年10月12日～15日



恵庭市文化協会創立50周年記念事業として開催された展覧会には、輪島進一会員の作品をはじめ、川本ヤスヒロ、斉藤嗣火、田崎謙一、渡辺貞之全道展会員作品と今年の第77回全道展で奨励賞を受賞した安倍聖哉さんの他に、故・全道展創立会員の松島正幸、故・全道展会員の紺野修司、故・全道展会員の谷口一芳氏の個性豊かな作品が展示されており、多くの来場者が作品の前で鑑賞を楽しんでいた。(川本ヤスヒロ記) 2023,10,13

吉川勝久木版画展

道新ぎゃらりー 2023年11月2日～7日



全道展版画部門会員の吉川勝久さんは、1991年に木版画をはじめ、今回初めて個展を行った。会場には、「遠い出会い」1992年から「鬼灯」2023年までの木版画作品が50点展示されていた。その中で、「心の森」2014年(写真左)と「森の扉」2016年(写真右)などの大作が23点あり、個々の作品から作者のエネルギッシュな感性が伝わってきた。「彫刻のある風景」は只今制作中の版木が展示されていて、これからの仕上がりが楽しみである。(川本ヤスヒロ記) 2023,11,3

第2回躍動する十勝の美術作家展 ENERGETIC ARTISTS of TOKACHI 2023

神田日勝記念美術館 2023年11月1日～12月10日



渡邊禎祥「じいちゃんのトランク」



今西直人「焰ほのお」

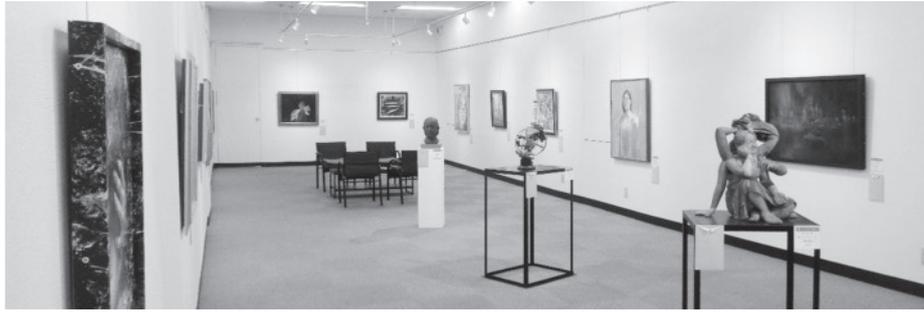
50年前に亡くなった神田日勝の「十勝の大地に力ある作家を育てたい」その意志のもと3年前に1回展を実施した。今年は2回展を迎え、全道展からは9名の会員が出品、確かなてごたえを感じた会場だった。

出品者—浅川茂・今西直人・梅津美香・近藤みどり・齊藤隆博・佐藤真康・高田健治・森弘志・渡邊禎祥
特別展示—神田日勝

(川本ヤスヒロ記) 2023,12,10

全道展 第11回新鋭展

ギャラリー大通美術館 2023年11月7日～11月12日



絵画13点、版画5点、彫刻3点、工芸4点の計25点の展示。会場全体としては魅力的な展示となった。

絵画部門は最大30号の制限があったが、出品は30号6点、20号2点、10号5点の総計13点は少々、寂しかった。作品と作品の間が広く感じ、気になる展示となった。

内容は各々の力量が発揮されて魅力的ではあるが、今の自分を守るのではなく、自分の可能性を信じ、殻を打ち破って先に進むことの喜びも大きい事を知ってほしい。前回も述べたが、このような企画展こそ実験の場と思って頂ければ、全道展企画する側にとっても幸いである。
(梅津薫記) 2023,11,7

札幌・恵庭・深川・鹿追・倶知安・室蘭の美術館、ギャラリーから (1月～12月分)

- ギャラリー大通美術館 5月 光風会展
・第77回全道展で入選した田中恵子、本間洋子さんが出品
- ギャラリー大通美術館 11月 北海道九条美術の会 創立17周年記念作品展
・全道展絵画部門の奥井登代さん、版画部門の重岡静世、澁谷美求、福岡幸一会員、彫刻部門の田中隆行会員が出品
- 大丸藤井セントラルスカイホール 11月 春陽会道作家展 (絵画部)
・全道展絵画部門の豊島章子、山本周子会友が出品
- 道新ギャラリー 12月 二人のATSUKOの版画展
・全道展版画部門の関川敦子会員が出品
- 恵庭市民会館 7月 第54回恵美展 創立50周年記念イベント★同時開催：美術協会ゆかりの作家展
・全道展絵画部門の山本恒二会員、今年版画部門で会員推挙の高崎幸子、恵庭美術協会会長の高崎勝司会友が出品
- アートホール東洲館 10月 耀展2023展 ※11月6日～12日 ギャラリー大通美術館
・梅津薫、川本ヤスヒロ、斉藤嗣火、田崎謙一、故・藤井高志、福島孝寿、渡辺貞之が出品
- アートホール東洲館 11月 大井戸百合子展
・全道展版画部門の大井戸百合子会員が「南の人々の暮らし」をテーマに出品
- 神田日勝記念館 6月7日～8月6日 よみがえる全十勝美術展
・開館30周年記念の企画展に全道展絵画部門渡邊禎祥会員が「郷愁」「交通止」F100号2点を出品
- 小川原脩記念美術館 10月7日～2024年1月14日 第65回麓彩会展
・全道展絵画部門の坂口清一、羽山雅愉、米澤邦子会員、小島英一、菊池ひとみ会友が出品
- 室蘭市民美術館 11月9日～2024年1月14日 中野美砂子作品展
・全道展絵画部門の中野美砂子会友が「無時間考(永遠)を求めて」をテーマに出品

❖❖❖❖❖ 2024年 第78回全道展 ❖❖❖❖❖

会期 6月12日(水)～23日(日)10時～18時

※月曜日休館、最終日16時30分まで

会場 札幌市民ギャラリー

※詳細は出品目録などの資料、
全道展ホームページで確認願います。

全道展情報発信してます

ホームページ



全道展

検索

<http://www.zendouten.jp>



編集後記

第77回全道展と地区展の他に、今年は特に全道展に出品している作家の個展が多かったので積極的に取材しました。伏木田光夫個展、渡会純价展(銅版画人生60年)をはじめ、木村富秋・由紀子展、砂田友治・陽子回顧展・工藤善蔵作品展・吉川勝久木版画展など多数のすばらしい展覧会が開催されました。作家探訪は、彫刻の川名義美会員と絵画の安藤静枝会友にお願いしました。今年も皆様のご協力をいただきまして誠にありがとうございました。

2023年12月31日
ZEN編集部 川本ヤスヒロ・梅津薫